

研究活動報告

OECD ウクライナ難民危機に関する移民政策特別会合、及びワルシャワ大学移民研究所とのワークショップ

5月5日にポーランド・ワルシャワにて OECD ウクライナ難民危機に関する移民政策特別会合が開催されたところ、出入国在留管理庁から安東健太郎国際企画調整官、OECD 代表部から市川聡一等書記官、当研究所からは是川夕国際関係部長が参加した。同会合は2022年2月24日にロシアによるウクライナ侵攻が発生した後、500万人にも及ぶ難民が発生していることを受け、特別に開催されたものである。新型コロナ禍下にもかかわらず、多くの加盟国から対面での参加が見られ、ウクライナ難民の受け入れを通じた同国への連帯が示された。当方からもこの間のわが国の避難民受け入れの概要について発言を行った。ウクライナからはラゼブナ (Ms. Maryna Lazebna) 社会政策大臣が参加し、わが国を含めた各国からの支援に謝意が示された。

また、同会合に先立って、ワルシャワ大学移民研究センター (Center of Migration Research, Warsaw University) にて同研究所の Pawel Kaczmarczyk 所長ら同研究所に所属する研究員と是川との間で両国の移民研究に関するミニワークショップが開催された。当方からは国立社会保障・人口問題研究所の紹介に加え、日本の移民受け入れの現状について説明を行い、先方からも同様の内容にて説明があった後、ディスカッションを行った。特にポーランドは2014年のロシアのクリミア併合後、数多くのウクライナ移民を受け入れてきたという経緯もあり、大変貴重な機会となった。

(是川 夕 記)

複合死因研究ネットワーク会合 (オンライン)

2022年5月19日 (木)、20日 (金) に、複合死因研究ネットワーク会合が開催された。MultiCause と称されるこのネットワークは、複合死因研究に携わる世界各国の研究者が参加しており、会合は2~3年に1度行われ、前回は2019年パリ INED (フランス国立人口研究所) で開催され筆者も参加したが、今年は新型コロナ感染症対策により、ボンのドイツ連邦薬品医療機器研究所 (BfArM) と Webex によるオンラインのハイブリッド形式で開催され、オンライン参加した。現在進行中の厚労科研プロジェクト「人口の健康・疾病構造の変化にともなう複合死因の分析手法の開発とその妥当性の評価のための研究 (研究代表者 別府志海)」で行っている研究について、慶応大学石井太教授と筆者が以下の日本の複合死因に関する報告を行った。

- Analysis of the Multiple Causes of Death in Japan with Network Analysis (石井太, 林玲子, 篠原恵美子, 別府志海)

- Senility Deaths in Japan (林玲子, 石井太, 篠原恵美子, 別府志海)

今回の会合では、ドイツ、フランスをはじめとした西ヨーロッパの報告のほか、オーストラリアから多くの報告があり、また新型コロナ感染症に関する報告や、アフリカにおける口頭剖検 (Verbal Autopsy) に関する報告など、内容的な広がりもあった。

(林 玲子 記)